

荷風全集

第十四卷

荷風全集

第十四卷

岩波書店

昭和三十八年 六月 八日 印刷

荷風全集第十四卷

昭和三十八年 六月十二日 發行

定價 六百圓

著 者 永 井 壯 吉

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
株式會社 岩 波 書 店

目次

江戸藝術論	一
浮世繪の鑑賞	三
鈴木春信の錦繪	一七
浮世繪の山水畫と江戸名所	三三
泰西人の見たる葛飾北齋	五三
ゴックウルの歌麿及北齋傳	六七
歌米人の浮世繪研究	八一
浮世繪と江戸演劇	九五
衰頹期の浮世繪	一二三
狂歌を論ず	一三一
江戸演劇の特徴	一四三
江戸藝術論 異文	一五五

浮世繪の山水畫と江戸名所	一五七
ゴンクウルの歌麿傳 并に北齋傳	一八一
歐人の觀たる葛飾北齋	二〇三
斷腸亭雜稿	二二七
序	二二九
斷腸亭記(庭後隱士)	二三〇
築地草	二三七
矢はずぐさ	二四七
矢立のちび筆	二七三
雨聲會の記	二七九
一夕	二八三
初硯	二八九
築地がよひ	二九五
草 箒	三〇一
何ぢやゝら	三〇七

葡萄棚	三三
松の内	三七
夏ごろも	三三
來青花	三五
曝書	三九
夕立	三二
立秋所見	三五
雜草園 其二	三七
文明發刊の辭	三九
文反古	四七
文明一周年の辭	五三
書かでの記	五七
小説作法	九三
後記	四〇九

江戸藝術論

浮世繪の鑑賞

一

我邦現代に於ける西洋文明模倣の狀況を窺ひ見るに、都市の改築を始めとして家屋什器庭園衣服に到るまで時代の趣味一般の趨勢に徴して、轉余をして日本文華の末路を悲しましむるものあり。余嘗て佛國より歸來りし頃、たま／＼芝靈廟の門前に立てる明治政廳初期の官吏某の銅像の制作を見るや、その制作者は何が故に新舊兩様の美術に對して其效果上相互の不利益たるべきかゝる地點を選擇せしや、全くその意を了解するに苦しみたる事あり。余はまたこの數年來市區改正と稱する土木工事が何等愛惜の念もなく見附と呼馴れし舊都の古城門を取拂ひ猶勢に乗じてその周圍に繁茂せる古松を濫伐するを見、日本人の歴史に對する精神の有無を疑はざるを得ざりき。泰西の都市にありては一樹の古木一字の堂舎と雖、猶民族過去の光榮を表現すべき貴重なる寶物として尊敬せらるゝは、既に幾多漫遊者の見知る處ならずや。然るにわが國に於て歴史の尊重は唯だ保守頑冥の徒が功利的口實の便宜となるのみにして、一般の國民に對しては却て學藝の進歩と知識の開發

に多大の妨害をなすに過ぎず。これ等は實に僅少なる一二の例證のみ。余は甚しく憤りき又悲しみき。然れども幸ひにして此の悲憤と絶望とはやがて余をして日本人古來の遺傳性たる諦めの無差別觀に入らしむる階梯となりぬ。見ずや、上野の老杉は黙々として語らず訴へず、獨りおのれの命數を知り従容として枯死し行けり。無情の草木遂に有情の人に優るところなからずや。

余は初めて現代の我が社會は現代人のものにして余等の決して嘴を容るべきものにあらざる事を知りぬ。こゝに於て、古蹟の破棄も時代の醜化もまた再び何等の憤慨を催さしめず。そは却て此の上もなき諷刺的滑稽の材料を提供するが故に、一變して最も詭辯的な興味を中心となりぬ。然れども茶番は要するに茶番たるに過ぎず。いかに洒脫なる幫間といへども徹頭徹尾扇子に頭を叩いてのみ日を送り得べきものに非ず。余は日々時代の茶番に打興ずる事を勉むると共に、又時としては心ひそかに整頓せる過去の生活を空想せざるを得ざりき。過去を夢見んには殘されたる過去の文學美術の力によらざる可からず。これ余が廣重と北齋との江戸名所繪によりて都會と其の近郊の風景を見ん事を冀ひ、鳥居奥村派の制作によりて衣服の模様器具の意匠を尋ね、天明以後の美人畫によりては、專制時代の疲弊墮落せる平民の生活を窺ひ、身につまざるゝ悲哀の美感を求めし所以とす。

浮世繪は余をして實に渾然たる夢想の世界に遊ばしむ。浮世繪は外人の賞するが如く常に美術としての價値のみに留まらず、余に對しては實に宗教の如き精神的慰藉を感じしむるなり。特殊なるこの美術は壓迫せられたる江戸平民の手によりて發生し絶えず政府の迫害を蒙りつゝ而も能く其發達を遂げたりき。當時政府の保護を得たる狩野家即ち日本十八世紀のアカデミイ畫派の作品は決してこの時代の美術的光榮を後世に傳ふるものとはならざりき。而してそは全く遠島に流され手錠の刑を受けたる卑しむべき町繪師の功績たらずや。浮世繪は隱然として政府の迫害に屈服せざりし平民の意氣を示し其の凱歌を奏するものならずや。官營藝術の虛妄なるに對抗し、眞正自由なる藝術の勝利を立證したるものならずや。宮武外骨氏の筆禍史は委さに其の事跡を考證叙述して餘すなし。余また茲に多く云ふの要あるを見ず。

三

浮世繪はその木板摺の紙質と顔料との結果によりて得たる特殊の色調と、その極めて狹少なる規模とによりて、寔に顯著なる特徴を有する美術たり。浮世繪は概して奉書または西之内に印刷せられ、その色彩は皆褪めたる如く淡くして光澤なし、試みにこれを活氣ある油畫の色と比較せば、一ツは赫々たる烈日の光を望むが如く、一ツは暗澹たる行燈の火影を見るの思ひあり。油畫の色には

強き意味あり主張ありて能く制作者の精神を示せり。此れに反して、若し木板摺の眠氣なる色彩中に制作者の精神ありとせば、それは全く專制時代の萎微したる人心の反映のみ。余はかゝる暗黒時代の恐怖と悲哀と疲勞とを暗示せらるゝ點に於て、恰も娼婦が啜り泣きする忍び音を聞く如き、この裏悲しく頼りなき色調を忘るゝ事能はざるなり。余は現代の社會に接觸して、常に強者の横暴を極むる事を見て義憤する時、翻つてこの頼りなき色彩の美を思ひその中に潜める哀訴の旋律によりて、暗黒なる過去を再現せしむれば、忽ち東洋固有の專制的精神の何たるかを知ると共に、深く正義を云々するの愚なることを悟らずんばならず。希臘の美術はアポロンを神となしたる國土に發生し、浮世繪は蟲けら同然なる町人の手によりて、日當り惡しき横町の借家に制作せられぬ。今や時代は全く變革せられたりと稱すれども、要するにそは外觀のみ。一度合理の眼を以て其の外皮を看破せば武斷政治の精神は毫も百年以前と異ることなし。江戸木板畫の悲しき色彩が、全く時間の懸隔なく深くわが胸底に浸み入りて常に親密なる囁きを傳ふる所以蓋し偶然にあらざるべし。余は何が故か近來主張を有する強き西洋の藝術に對しては、宛ら山嶽を望むが如く唯茫然として此れを仰ぎ見るの傾きあるに反し、一度其の眼を轉じて、個性に乏しく單調にして疲勞せる江戸の文學美術に對すれば、忽ち精神的並に肉體的に麻痺の慰安を感じざるを得ず。されば余の浮世繪に關する鑑賞と云ひ研究といふが如き、元より嚴密なる審美の學理に因るものならず。若し問ふものあらば余は唯

特別なる事情の下に、特別なる一種の藝術を喜ぶと答へんのみ。況んや泰西人の浮世繪に關する審美的工藝的研究は既に遠く十年前全く細微に涉りて完了せられたるに於てをや。

四

余は既に幾度か木にて造り紙にて張りたる日本傳來の家屋に住し春風秋雨四季の氣候に對する郷土的感覺の如何を叙述したり。此の如く脆弱にして清楚なる家屋と此の如く濕氣に滿ち變化に富める氣候の中に棲息すれば、嘗て廣大堅固なる西洋の居室に直立濶歩したりし時とは、百般の事自ら嗜好を異にするは蓋し當然の事たるべし。余にして若しマロツク皮の大椅子に横りて圖書室に食後の葉卷を吹かすの富を有せしめば、自らピアノと油繪と大理石の彫刻を欲すべし。然れども幸か不幸か、余は今猶疊の上に兩脚を曲折げ乏しき火鉢の炭火によりて寒を凌ぎ、簾を動かす朝の風、廂を打つ夜半の雨を聴く人たり。清貧と安逸と無聊の生涯を喜び、醉生夢死に満足せんと力むるものたり。曇りし空の光は軒先に遮られ、障子の紙を透してこゝに特殊の陰影をなす。かゝる居室に適應すべき美術は、先づその形小ならざる可らず、その質は輕からざる可らず。然るに現代の新しき制作品中、余は不幸にして未だ西洋の miniature または銅板畫に類すべきものあるを見ず。浮世繪木板摺はよくこの缺陷を補ふものにあらずや。都門の劇場に拙劣なる翻譯劇出づるや、朋黨結

んで直ちに此れを以て新しき藝術の出現と叫び、官營の美術展覽場に賤しき畫工等虛名の鎬を削れば、猜疑嫉妬の俗論轟々として沸くが如き時、秋の雨しとくと降りそゞぎて、蟲の音次第に消え行く郊外の佗住居に、倦みつかれたる晝下り、尋ね來る友もなきまゝ、獨り竊に浮世繪取出して眺むれば、嗚呼、春章寫樂豐國は江戸盛時の演劇を眼前に髣髴たらしめ、歌麿榮之は不夜城の歡樂に人を誘ひ、北齋廣重は閑雅なる市中の風景に遊ばしむ。余は之に依つて自ら慰むる處なしとせざるなり。

五

近世的大詩人ヴェルハアレンの詩篇に、それが郷國フランドルの古畫に現はれたる生活慾の横溢を稱美したる一章あり。

Art flamand, tu les connus, toi

Et tu les aimes bien, les gouges,

Au torse épais, aux tétons rouges ;

Tes plus fières chefs-d'œuvres en font foi.

Que tu peignes reines, déesses,

Ou nymphes, émergeant des flots,

Par troupes, en roses îlots,

Ou sirènes enchanteresses,

Ou Pomons aux contours pleins,

Symbolisant les saisons belles,

Grand art des maîtres ce sont elles,

Ce sont les gouges que tu peins.

フランドルの美術よ、汝こそはよく彼の淫婦を知りたれ。よくかの乳房赤く肉逞しき淫婦を愛したれ。フランドルの美術の傑作はいづれかその證ならざる。

その妃を描き女神を描き、或は紅の島に群れなして波間に浮ぶナンフ或は妖艶の人魚の姫。

或はまた四季の眺めを形取る肉付のよきポモンの女神。およそフランドル名家の描きし大作は、皆これかの淫蕩なる婦女にあらざるなきを。

この詩章を讀みて卑猥なりとなすものあらば、そは此の詩章の深意を解すること能はざるものな

り。ヴェルハアレンはフランドルの美術に現れし裸體の婦女によりて偉大なる人間の活力を想像し賞讃措く能はざりしなり。彼は清淨と禁慾を主としたる從來の道德及び宗教の柵外に出で、生活の充實と意志の向上を以て人生の眞意義となせり。永劫の理想に向つて人生意氣の赴く所、こゝに偉大の感情あり。悲壯の美あり、崇高の觀念あり。汚辱も淫慾も皆これ人類活力の一現象ならずして何ぞ。彼の尊ぶ所は深甚なる意氣の旺盛のみ。

Dans la splendeur des paysages,

Et des palais, lambrissés d'or,

Dans la pourpre et dans le décor

Somptueux des anciens âges,

Vos femmes suaient la santé,

Rouges de sang, blanches de graisse ;

Elles menaient les ruts en laisse,

Avec des airs de royauté.

絶佳明媚の山水、粉壁朱欄燦然たる宮闕の中、壯麗なる古代の裝飾に圍繞せられて、フラン

ドル畫中の婦女は皆脂肪^{みなあぶら}ぎりて肌白く血液に満ちて色赤く、おのが身の强健に堪へざる如く汗^{あせ}かけり。これ等の婦女は恣^しにその淫情を解放して意氣揚々いさゝかの羞^{はづ}る色だもなし。

これ歐洲新思想の急先鋒たるヴェルハアレンが郷土の美術を詠じたる最後の一章たり。フランドルはもと自由の國たり。フラマン人は西班牙政廳の羈絆^{きはん}を脱するや最近十九世紀の文明に乗じて一大飛躍を試みたる國民たり。ヴェルハアレンが Rubens, Van Dyck, Teniers 等十七世紀の名畫を見その強烈なる色彩に感激したるは毫^ちも怪しむに足らざるなり。而して余は今自己の何たるかを反省すれば、余はヴェルハアレンの如く白耳義人^{ベルヂツクじん}にあらずして日本人なりき。生れながらにして其の運命と境遇とを異にする東洋人なり。戀愛の至情はいふも更なり、異性に對する凡^{すべ}ての性慾的感覚を以て社會的最大の罪惡となされたる法制を戴くものたり。泣く兒と地頭^{ちとう}には勝つ可からざる事を教へられたる人間たり。物云へば唇^{くちびる}寒きを知る國民たり。ヴェルハアレンを感奮せしめたる生血^{なまち}滴^{した}る羊の^{びにく}と芳醇^{ほうじゆん}の葡萄酒と逞^{たくま}しき婦女の畫も何かはせん。嗚呼余は浮世繪を愛す。苦界^{くがい}十年親の爲めに身を賣りたる遊女^{いうぢよ}が繪姿^{えすがた}はわれを泣かしむ。竹格子^{たけがら}の窓によりて唯だ茫然^{げんぜん}と流るゝ水を眺むる藝者の姿はわれを喜ばしむ。夜蕎麥賣^{よそばうり}の行燈^{あんどう}淋^けし氣に残る川端の夜景^{やけい}はわれを酔^よはしむ。雨夜^{あまよ}の月に啼^なく時鳥^{ときすず}、時雨^{しぐれ}に散る秋の木^この葉、落花の風にかすれ行く鐘の音^{おね}、行き暮るゝ山路^{やまぢう}の雪、およそ果敢^{はか}なく頼りなく望みなく、この世は唯だ夢とのみ譯もなく嗟嘆^{さたん}せしむるもの悉^{ことごと}くわれには親^{した}